

# 「あきだわら」

## 【品種の特徴】

- 出穂期は「コシヒカリ」に比べ8日程度、成熟期は11日程度遅い晩生のうるち種。
- 耐倒伏性はやや強。多肥栽培で多収。
- いもち病ほ場抵抗性は、葉いもちは弱、穂いちはやや弱。

## 【生育のめやす】

生育ステージ	葉数 (葉)	草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD)
最高分けつ期 (7月5日頃)	9.5~10.5	56~60	450~550	40~43
幼穂形成期 (7月20日頃)	11.5~12.0	78~83	360~430	33~35
2回目穂肥時 (7月29日頃)	12.5~13.5	86~90	350~400	35~38
出穂期 (8月12日頃)	13.0~14.0	稈長 87	330~350	36~40

## 【収量構成要素及び品質のめやす】

目標収量	720kg/10a
穂数	330~350本/m <sup>2</sup>
一穂粒数	102~110粒
m <sup>2</sup> 当たり粒数	36,000粒
登熟歩合	90%
千粒重	22.2g

## 【主な作業と生育ステージ及び管理のポイント】

時期	4月		5月			6月			7月			8月			9月		
	20		10	20		10	20		10	20		10	20		10	20	
主な作業と生育ステージ	は種	田植え			中干し			最高分けつ期	穂肥	幼穂形成期	穂肥	出穂期			落水	収穫成熟期	

基肥施用	田植え	中干し・溝切り	病虫害防除	穂肥施用・水管理	収穫・乾燥・調製
<ul style="list-style-type: none"> <li>・基肥量は窒素成分で7kg/10aをめやすとする。</li> <li>・地力の高いほ場では基肥を減肥し、大豆跡は原則として基肥を施用しない。</li> <li>・倒伏は減収や品質低下を招くため、極端な多肥は避ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・田植えは5月中旬に行う。</li> <li>・栽植密度は60株/坪、1株当たり苗数は3~4本をめやすとする。</li> <li>・過度な疎植は穂数不足による収量低下を招くので避ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中干し・溝切りを実施し、一度田面を固めて収穫時の機械作業が可能な地耐力を確保する。</li> <li>・中干し後出穂前は稲体活力が低下しないよう土壌を乾かさないようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・葉いもち防除は、必ず育苗箱施用により行う。</li> <li>・穂いもち防除は、予防防除を行う。</li> <li>・斑点米カメムシ類の防除は、草刈り及び加害種に応じた薬剤防除を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・穂肥は出穂期25~23日前(幼穂形成期頃)と14日前の2回に分けて施用する。</li> <li>・1回目は、幼穂形成を確認して施用時期が遅れないよう注意する。早すぎる施用は、止葉がのびやすくなるので注意する。</li> <li>・1回の穂肥量は窒素成分で2~3kg/10aをめやすとする。</li> <li>・穂肥施用時の生育がめやすを大幅に超える場合は、施用量を控える。</li> <li>・登熟期間中は飽水管理を基本とし、通水最終日には十分かん水する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・収穫適期は黄化粒割合が85~90%になった頃であり、積算温度1,050~1,100℃である。</li> <li>・胴割粒の発生を防止するため、乾燥は適正温度で行い、急激に乾燥させない。</li> <li>・篩い目は1.85mm以上を使用する。</li> </ul>